

(電子メール施行)
農技第1195号
令和2年8月7日

関係機関長 様

兵庫県病虫害防除所長

令和2年度病虫害発生予報第4号を發表します。

令和2年度病虫害発生予報 第4号

向こう1か月の病虫害発生予想

作物名	病虫害名	発生予想	発生現況
イネ	いもち病(穂いもち)	平年並	平年並
	紋枯病	平年並	やや少
	縮葉枯病	やや多	平年並
	細菌性病害 (もみ枯細菌病・内穎褐変病)	平年並	—
	ヒメトビウンカ	やや多	平年並
	ツマグロヨコバイ	平年並	やや少
	セジロウンカ	平年並	平年並
	トビイロウンカ	やや多	平年並
	斑点米カメムシ類	やや多	平年並
	イネツトムシ	平年並	やや少
	コブノメイガ	やや多	平年並
	ダイズ	立枯性病害	平年並
べと病		やや少	やや少
葉焼病		平年並	少
ハスモンヨトウ		平年並	少
ハダニ類		やや多	やや多
吸実性カメムシ類		やや多	平年並
ナシ	黒斑病	平年並	平年並
	黒星病	やや少	少
野菜共通	ハイマダラノメイガ	多	多
	ハスモンヨトウ	やや多	やや多
	シロイチモジヨトウ	やや多	やや多
果樹共通	果樹カメムシ類	やや多	平年並

* 気象の概況

近畿地方 1か月予報
(8月8日から9月7日までの天候見通し)

令和2年8月6日
大阪管区气象台 発表

<特に注意を要する事項>

期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。

<予想される向こう1か月の天候>

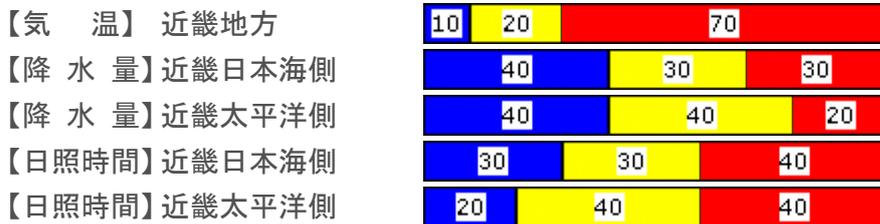
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

近畿日本海側では、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。近畿太平洋側では、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率70%です。降水量は、近畿太平洋側で平年並または少ない確率ともに40%です。日照時間は、近畿太平洋側で平年並または多い確率ともに40%です。

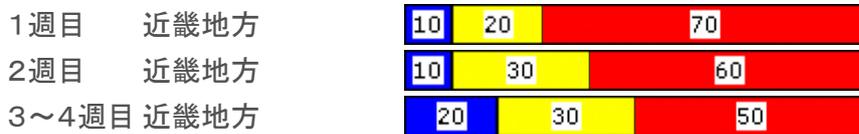
週別の気温は、1週目は、高い確率70%です。2週目は、高い確率60%です。3～4週目は、高い確率50%です。

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>



凡例: ■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

<気温経過の各階級の確率(%)>



凡例: ■ 低い ■ 平年並 ■ 高い

<予報の対象期間>

- 1か月 : 8月8日(土)～9月7日(月)
- 1週目 : 8月8日(土)～8月14日(金)
- 2週目 : 8月15日(土)～8月21日(金)
- 3～4週目 : 8月22日(土)～9月4日(金)

* 発生概況及び防除対策上の留意点

イネ

1 【いもち病】（穂いもち）

- (1) 予報の内容 発生量： 平年並
- (2) 予報の根拠

ア 7月下旬の予察圃場^{ほじょう}では、葉いもちは発病株率8.0%（平年値30.4%）の発病を確認している。同時期の現地調査では発病圃場率15.7%（過去7カ年平均16.8%）と平年並の発生が確認されている。

イ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高く、降水量は平年並または少ない、日照時間は平年並または多いとされており、本病の発生を助長する要因は少ない。しかしながら、葉いもちの発生量が平年並であることから、穂いもちへの移行は平年並となると考えられる。

(3) 防除上の留意点

ア 穂いもちの伝染源である葉いもちの発生量は平年並であることから、本病の常発地、谷間や山陰など日陰になりやすい圃場などは特に注意が必要である。このような圃場や葉いもちの病斑が上位葉にみられた圃場では、穂いもちの発生に留意し、状況に応じて薬剤散布を実施する。

イ 薬剤防除を行う場合は、病害虫・雑草防除指導指針（兵庫県農薬情報システム）等を参考にし、農薬使用基準を守ること。

病害虫・雑草防除指導指針（兵庫県農薬情報システム）
<http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/hyogo>

2 【紋枯病】

- (1) 予報の内容 発生量： 平年並
- (2) 予報の根拠

ア 7月下旬の予察圃場では発病を確認していないが、現地調査では発病圃場率2.8%（過去7カ年平均7.9%）とやや少ない発生が確認されている。

イ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高いとされており、発生は平年並となると予想される。

3 【縞葉枯病】

- (1) 予報の内容 発生量： やや多
- (2) 予報の根拠

ア 7月下旬の予察圃場では発生を確認していないが、現地調査では発病圃場率8.7%（平年値6.5%）と平年並の発生が確認されている。

イ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高いとされており、本病を媒介するヒメトビウンカの増殖が進むことから、本病の発生はやや多くなると予想される。

(3) 防除上の留意点

ア 媒介虫であるヒメトビウンカの発生はやや多いと予想している（後述）。普通期

栽培では今後の感染を防止するために、現在発病が目立つ圃場では本田防除を実施すること。

イ 薬剤防除を行う場合は、病害虫・雑草防除指導指針（兵庫県農薬情報システム）等を参考にし、農薬使用基準を守ること。

病害虫・雑草防除指導指針（兵庫県農薬情報システム）
<http://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/top/hyogo>

4 【細菌性病害】（もみ枯細菌病・内穎褐変病）

- (1) 予報の内容 発生量：平年並
(2) 予報の根拠

ア 本病の感染時期は主に開花期頃で、この時期に高温で降雨があると発病を助長する。

イ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高く、降水量は平年並または少ない、日照時間は平年並または多いと予想されており、平年並の発生が予想される。

- (3) 防除上の留意点

ア 細菌性病害は台風などの風雨によって、植物体への侵入が促進され、圃場全体への伝染が起こる。多発生を防止するためにも、本病の防除には、出穂直前から開花期までの薬剤散布を実施することが望ましい。

イ 薬剤防除を行う場合は、病害虫・雑草防除指導指針（兵庫県農薬情報システム）等を参考にし、農薬使用基準を守ること。

病害虫・雑草防除指導指針（兵庫県農薬情報システム）
<http://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/top/hyogo>

5 【ヒメトビウンカ】

- (1) 予報の内容 発生量：やや多
(2) 予報の根拠

ア 予察圃場における7月下旬のすくい取り調査(10回振り)で、加西市で成虫1頭(平年値4.4頭)、朝来市では成虫10.5頭(平年値6.1頭)、幼虫3頭(平年値2.3頭)であった。また、現地調査では広い地域で発生が確認されており、発生圃場率34.2%(平年値34.2%)と、いずれも平年並の発生であった。

イ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高いと予想されており、本種の増殖が進むと考えられる。

- (3) 防除上の留意点

ア 本種はイネ縞葉枯病を媒介する。現在、発病株が目立つ圃場ではウイルス保毒虫が増加し、後期感染と翌年の多発につながるおそれがあるので注意する。

イ 薬剤防除を行う場合は、病害虫・雑草防除指導指針（兵庫県農薬情報システム）等を参考にし、農薬使用基準を守ること。

病害虫・雑草防除指導指針（兵庫県農薬情報システム）
<http://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/top/hyogo>

6 【ツマグロヨコバイ】

- (1) 予報の内容 発生量：平年並

(2) 予報の根拠

ア 県下の3カ所に設置している予察灯では、7月1半旬～5半旬までの合計誘殺数は、加西市(農技センター内)で1頭(平年値31.6頭)、南あわじ市(淡路農技内)で18頭(同29.8頭)、朝来市(北部農技内)で1頭(同7.4頭)であった。また、7月下旬の現地調査では成・幼虫数は0.6頭/10回振り(平年値1.5頭)と、いずれもやや少ない発生であった。

イ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高いとされており、密度が増加して発生は平年並になると予想される。

7 【セジロウンカ】

(1) 予報の内容

発生量：平年並

(2) 予報の根拠

ア 県下3カ所に設置している予察灯では、7月1半旬～5半旬までの合計誘殺数は、加西市で0頭(平年値3.5頭)、南あわじ市で17頭(同38.2頭)、朝来市で16頭(同12.6頭)であった。また、7月下旬の現地調査では成・幼虫数は、すくい取り調査で1.2頭/10回(平年値0.5頭)及び払い落とし調査で0.1頭/10株(同0.5頭)であり、発生程度にばらつきが見られるものの、平年並の発生であった。

ウ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高いとされている。現在、本種の繁殖に好適なイネの生育ステージであるが、今後最盛期を過ぎることから、発生量は平年並のまま推移すると考えられる。

8 【トビイロウンカ】

(1) 予報の内容

発生量：やや多

(2) 予報の根拠

ア 県下の3カ所に設置している予察灯では、南あわじ市で7月4半旬に飛来が認められた。

イ 7月下旬の現地調査では、発生圃場率が普通期栽培で3.4%(平年値3.6%)、すくい取り調査による虫数は成虫が0.1頭/10回(平年値0.1頭)で幼虫の発生は確認されていない。また、払い落とし調査で0頭/10株(同0.1頭)と、いずれも発生程度は平年並であった。

イ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高いと予想されており、本種の増殖が進み、やや多い発生になると考えられる。

(3) 防除上の留意点

ア 本種は海外飛来性害虫であり、“坪枯れ”を起こす重要害虫である。増殖型の短翅型雌と幼虫は株元に生息している。圃場での発生状況をよく観察して発生を認めれば早期防除に努めること。普通期栽培における防除の目安は、8月上～中旬では成虫で100株当たり30頭、8月下旬～9月上旬では成・幼虫で株当たり2頭以上である。

イ 薬剤防除を行う場合は、病害虫・雑草防除指導指針(兵庫県農薬情報システム)等を参考にし、農薬使用基準を守ること。また、同系統の薬剤の連用は避ける。病害虫・雑草防除指導指針(兵庫県農薬情報システム)

<http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/hyogo>

9 【斑点米カメムシ類】

- (1) 予報の内容 発生量：やや多
- (2) 予報の根拠
- ア 7月下旬の予察圃場(朝来市)ではすくい取り調査では0.5頭/10回(平年値0.3頭)であった。
 - イ 現地調査では、7月下旬に発生が認められているほか、畦畔では広く発生が確認されている。
 - ウ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高いとされており、斑点米カメムシ類の活動が高まるとともに増殖が進み、発生はやや多くなると予想される。
- (3) 防除上の留意点
- ア 出穂期までに生息場所である圃場周辺(畦畔等)の除草を行い、生息密度の低下を図ること。ただし出穂直前と出穂後の畦畔除草は、水田へのカメムシ類の侵入を助長するので避けること。
 - イ 農薬散布は出穂期以降に実施すること。散布に当たってはカメムシ類の生息場所全体に届くよう散布すること。
 - ウ 薬剤防除を行う場合は、病虫害・雑草防除指導指針(兵庫県農薬情報システム)等を参考にし、農薬使用基準を守ること。また、同系統の薬剤の連用は避ける。
- 病虫害・雑草防除指導指針(兵庫県農薬情報システム)
<http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/hyogo>

10 【イネツトムシ】

- (1) 予報の内容 発生量：平年並
- (2) 予報の根拠
- ア 7月下旬の予察圃場において発生は確認されていないが、現地調査では、一部の地域で発生が認められている。
 - イ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高いとされており、気温の上昇により、平年並の発生になると予想される。

11 【コブノメイガ】

- (1) 予報の内容 発生量：やや多
- (2) 予報の根拠
- ア 県下3カ所に設置している予察灯への成虫の飛来は確認されていないが、7月下旬の予察圃場では、幼虫による食害葉(苞)が、加西市で1苞/25株(平年値0.5苞)、朝来市で0.09苞/25株(平年値0.1苞)が、それぞれ確認された。現地調査でも食害葉の発生が確認されている。
 - イ 今後1か月予報によると、気温は平年より高いとされており、本種の発生はやや多くなると予想される。
- (3) 防除上の留意点
- ア カスリ状の食害痕に注意すること。防除の目安は8月上旬の上位2葉の食害葉率が20%以上であり、一般に防除適期は8月中・下旬である。

- イ 薬剤防除を行う場合は、病害虫・雑草防除指導指針（兵庫県農薬情報システム）等を参考にし、農薬使用基準を守ること。また、同系統の薬剤の連用は避ける。
- 病害虫・雑草防除指導指針（兵庫県農薬情報システム）
<http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/hyogo>

ダイズ

1 【立枯性病害】

- (1) 予報の内容 発生量：平年並
- (2) 予報の根拠
ア 7月下旬の予察圃場及び現地調査では発病は確認されていない。
イ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高く、降水量は平年並または少ない、日照時間は平年並または多いと予想されているが、本病は、圃場の土壤水分が高くなることで発病するので、平年並に発生すると予想される。
- (3) 防除上の留意点
立枯性病害は排水不良が発病を助長する。畝間灌水を行う場合は、停滞水とならないように排水対策等を実施して、ほ場管理に努める。

2 【べと病】

- (1) 予報の内容 発生量：やや少
- (2) 予報の根拠
ア 7月下旬の予察圃場では発病は確認されていないが、現地調査では一部地域で発病が確認されている。
イ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高く、降水量は平年並または少ない、日照時間は平年並または多いと予想されており、本病はやや少ない発生で推移すると予想される。

3 【葉焼病】

- (1) 予報の内容 発生量：平年並
- (2) 予報の根拠
ア 7月下旬の予察圃場、現地調査とも発病は確認されていない。
イ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高く、日照時間は平年並または多いとされており、本病は高温性の病害であるため、気温の上昇により発病が予想され、平年並に発生すると予想される。

4 【ハスモンヨトウ】

- (1) 予報の内容 発生量：平年並
- (2) 予報の根拠
ア 7月下旬の予察圃場および現地調査では、幼虫および白変葉の発生は確認されていない。
イ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高く、降水量は平年並または少ないと予想されている。本種の増殖に好適な条件が続くと考えられ、今後は密度増加期を迎えることから、幼虫または白変葉の発生が予想される。

5 【ハダニ類】

(1) 予報の内容

発生量：やや多

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬の予察圃場では、加西市で5頭/10株(平年値2.3頭)の発生が確認された。現地調査では一部地域で発生がみられており、発生量は平年並となっている。

イ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高く、降水量は平年並または少ないと予想されており、本種の増殖に好適な条件が続くため、発生が助長されると考えられる。

(3) 防除上の留意点

ア 薬剤散布を行う場合は、薬液がハダニ類の生息している葉の裏に十分かかるように行うこと。

イ 薬剤防除を行う場合は、病虫害・雑草防除指導指針(兵庫県農薬情報システム)等を参考にし、農薬使用基準を守ること。また、同系統の薬剤の連用は避ける。

病虫害・雑草防除指導指針(兵庫県農薬情報システム)

<http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/hyogo>

6 【吸実性カメムシ類】

(1) 予報の内容

発生量：やや多

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬の予察圃場では発生は確認されていない。現地調査では発生密度は0.5頭/10株(平年値0.1頭)であった。

イ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高く、降水量は平年並または少ないと予想されており、カメムシ類の活動が活発になり、着莢期以降に発生が増加すると考えられる。

(3) 防除上の留意点

ア 着莢期に成虫が飛来し、吸汁や産卵をする。成虫は好適な餌がある場所を求めて移動するが、幼虫はそのまま滞在し、黄熟期まで加害し続けるため、薬剤散布は着莢期から10日間隔で2~3回実施する。

イ 薬剤防除を行う場合は、病虫害・雑草防除指導指針(兵庫県農薬情報システム)等を参考にし、農薬使用基準を守ること。また、同系統の薬剤の連用は避ける。

病虫害・雑草防除指導指針(兵庫県農薬情報システム)

<http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/hyogo>

ナシ

1 【黒斑病】

(1) 予報の内容

発生量：平年並

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬の朝来市(北部農技)の調査及び現地調査(県北部)では、短果枝の発病葉率3.3%(過去10年の平年値9.6%)、発育枝の発病葉率3.7%(同平年値4.3%)と、発生量は平年並となっている。

イ 今後1か月の気象予報によると、気温は平年より高いとされており、気温の上昇により、発生量は平年並で推移すると予想される。

2 【黒星病】

(1) 予報の内容

発生量：やや少

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬の朝来市（北部農技）の調査及び現地調査（県北部）では発病は認められなかった。

イ 今後1か月の気象予報によると、気温は平年より高いとされており、気温の上昇により、やや少ない発生で推移すると予想される。

野菜共通

1 【ハイマダラノメイガ】（アブラナ科野菜）

(1) 予報の内容

発生量：多

(2) 予報の根拠

ア 加西市（農技センター内）で実施している誘致植物^{※1}（クレオメ）での調査では、調査を開始した7月上旬（7月10日）から幼虫の寄生が確認され、その後は寄生花枝^{※2}率が50%を超える状態が続いている。7月の花枝寄生率の平均値は55.3%と、平年の発生（5.1%）と比較し、大幅に高い状態を示している。

イ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高く、降水量は平年並または少ないと予想されており、本種の増殖に好適な条件が続くと考えられる。今後栽培するアブラナ科野菜類では被害に注意する。

ウ 本種の発生状況の詳細については、令和2年度病害虫発生予察注意報第2号（令和2年8月7日付け）を参考にすること（HPに掲載）。

※1 対象とする害虫が好む植物で、発生状況を調べるために用いられる。

※2 クレオメは頂部に花が咲く分枝（花枝）を連続して展開する。ハイマダラノメイガの発生予察では、この花枝を調査単位としている。

(3) 防除上の留意点

ア 本種はアブラナ科野菜を特異的に加害する。

イ 発生盛期である8月中旬～9月下旬頃に育苗や播種・定植をする場合は、本種による加害が起こることを前提とした防除に努める。

ウ 幼虫が生長点を加害するため被害が大きく、被害を確認してからの防除では手遅れとなるため、育苗期や定植直後の予防的防除に努める。

エ 播種・定植時や育苗期に、粒剤や灌注で薬剤処理をした場合でも、その後の被害発生に注意する。天候等の条件により期待した防除効果が得られないこともあるので、本圃での薬剤防除の準備をしておくことが望ましい。

オ 薬剤防除を行う場合は、病害虫・雑草防除指導指針（兵庫県農薬情報システム）等を参考にし、農薬使用基準を守ること。また、同系統の薬剤の連用は避ける。

病害虫・雑草防除指導指針（兵庫県農薬情報システム）

<http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/hyogo>

2 【ハスモンヨトウ】

(1) 予報の内容

発生量：やや多

(2) 予報の根拠

ア 本種については、フェロモントラップ調査において早い時期から誘殺数が増加

したことから、本年7月21日付けで病虫害発生予察防除情報第1号を発表したところである（HPに掲載）。

加西市（農技センター内）に設置されているフェロモントラップにおいて、7月4～6半旬に合計誘殺数は229頭（平年値201頭）と、平年よりやや多い状態が続いている。

イ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高いとされており、これまで幼虫の発生は確認されていないが、本種の増殖に好適な条件になるため、野菜類での被害の発生に注意が必要である。

(3) 防除上の留意点

ア ピーマン、ナス、キャベツ、レタスをはじめ多くの野菜類を加害する。

イ 卵塊や集団でいる若齢幼虫を見つけたらすみやかに捕殺する。

ウ 中齢以降の幼虫には、薬剤による防除効果が低くなるので、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を徹底する。

エ 薬剤防除を行う場合は、病虫害・雑草防除指導指針（兵庫県農薬情報システム）等を参考にし、農薬使用基準を守ること。

病虫害・雑草防除指導指針（兵庫県農薬情報システム）

<http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/hyogo>

3 【シロイチモジヨトウ】

(1) 予報の内容

発生量：やや多

(2) 予報の根拠

ア 本種については、ハスモンヨトウと同様、フェロモントラップ調査において早い時期から誘殺数が増加したことから、本年7月21日付けで病虫害発生予察防除情報第1号を発表したところである（HPに掲載）。

加西市（農技センター内）と南あわじ市（淡路農技内）に設置しているフェロモントラップにおいて、7月4～6半旬の合計誘殺数は加西市で25頭（平年値24頭）、南あわじ市で107頭（同65.81頭）と、平年並～やや多い状態が続いている。

イ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高いとされており、本種の増殖に好適な状況が続くため、発生はやや多い状態で推移すると予想される。

(3) 防除上の留意点

ア 本種の加害植物は、ネギをはじめキャベツ、ピーマン、ナス、レタス等、多くの野菜類のほか、豆類、花き類など広い範囲に及ぶ。

イ 本種は茎葉の柔らかい部分を好んで食害する性質があり、定植直後の被害には特に注意すること。

ウ 薬剤散布を行う場合は、病虫害・雑草防除指導指針（兵庫県農薬情報システム）等を参考に薬剤を選定し、農薬使用基準を守ること。また、同系統の薬剤の連用は避ける。

病虫害・雑草防除指導指針（兵庫県農薬情報システム）

<http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/hyogo>

果樹共通

1 【果樹カメムシ類】

(1) 予報の内容

発生量：やや多

(2) 予報の根拠

ア 果樹を加害するカメムシ類については、春季から平年より多い発生が見られている(本年5月28日付病害虫発生予察注意報第1号参照、HPに掲載)。

イ チャバネアオカメムシ等果樹を加害するカメムシ類の発生量には隔年性があり、本年は表年(発生の多い年)に該当する。加西市(農技センター内)及び朝来市(北部農技内)に設置しているフェロモントラップでの7月1半旬～5半旬までのフェロモントラップでの合計誘殺数は、加西市で220頭(表年の平年値336.4頭)、朝来市で366頭(表年の過去3年分平均値267.8頭)と、表年としては平年並の誘殺が続いている。

ウ 予察灯におけるチャバネアオカメムシの7月1半旬～5半旬までの合計誘殺数は、加西市では6頭(表年の平年値2.4頭)、南あわじ市では11頭(同8.2頭)、朝来市では174頭(同195.6頭)とほぼ平年並であったが、南あわじ市の予察灯ではミナミアオカメムシの誘殺数が平年より多い状態が6月下旬以降続いている。

エ 8月以降は次世代成虫の出現期を迎えることから、ナシ、カキ、ブドウ等の果実への加害が懸念される。

(3) 防除上の留意点

ア 飛来状況は地域や園地で異なるため、園地の見回りを実施し、発生や被害を認めたら速やかに防除する。

イ ミナミアオカメムシは果樹以外にもイネや多くの野菜類も加害するので、発生状況には注意が必要である。

ウ 薬剤散布を行う場合は、病害虫・雑草防除指導指針(兵庫県農薬情報システム)等を参考に薬剤を選定し、農薬使用基準を守ること。また、同系統の薬剤の連用は避ける。

病害虫・雑草防除指導指針(兵庫県農薬情報システム)
(<http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/hyogo>)

* この情報は、兵庫県立農林水産技術総合センターホームページに掲載
(<http://hyogo-nourinsuisangc.jp/chuo/bojo/index.htm>)